【79】

氏　名（本籍）	清　水　純　子（滋 賀 県）
学 位 の 種 類	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　5230　号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**ユージン・オニール研究　視線をとらえる「不気味なもの」**

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	加　藤　行　夫
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	佐　野　隆　弥
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	宮　本　陽一郎
副　査	大妻女子大学教授	博士（文学）	山　名　章　二

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、シグムント・フロイトがその精神分析において使用した「不気味なもの」("the uncanny") という概念を援用して、ユージン・オニールの作品群に満ちた種々のアンビヴァレンス－現実と虚構、信と不信、生と死－を解釈しようとする試みである。論文の本体は以下の 4 部 14 章で構成される。

序論

第一部　自我の二重化（ドッペルゲンガー）

第 1 章　仮面の男 －『偉大なる神ブラウン』（*The Great God Brown*）

第 2 章　ヤーヌス神の二つの頭 －『特別な人』（*Diff'rent*）

第二部　領域侵犯

第 3 章　猿が檻から目覚める時 －『毛猿』（*The Hairy Ape*）

第 4 章　パワー・オブ・ブラックネス －『皇帝ジョーンズ』（*The Emperor Jones*）

第 5 章　黒と白の十字路 －『すべて神の子は翼がある』（*All God's Chillun Got Wings*）

第 6 章　母なる海に呑み込まれて －『アンナ・クリスティ』（*"Anna Christie"*）

第 7 章　西洋と東洋の境界線を踏み越えて －『泉』と『長者マルコ』（*The Fountain & Marco Millions*）

第 8 章　ジェントルマンになりたかった男 －『詩人気質』（*A Touch of the Poet*）

第三部　居心地の悪い家

第 9 章　居心地の悪い家 －『楡の木陰の欲望』（*Desire under the Elms*）

第 10 章　マノン家に宿る神なき時代の呪い －『喪服の似合うエレクトラ』（*Mourning Becomes Electra*）

第 11 章　抑圧されたものの回帰 －『夜への長い旅路』（*Long Day's Journey into Night*）

第四部　死の誘惑

第 12 章　マゾヒスティックな涅槃願望 －『地平の彼方』（*Beyond the Horizon*）

第 13 章　笑う不死者の秘密 －『ラザルスが笑った』（*Lazarus Laughed*）

第 14 章　第七の封印が解かれる時 －『氷人来たる』（*The Iceman Cometh*）

結論

ここで扱われる物語内の設定ないし劇的な展開としての「自我の二重化」、「領域侵犯」、「居心地の悪い家」、「死の誘惑」という各部は、どれもフロイトが「不気味なもの」として分類・列挙した諸現象に通じていると著者は論ずる。『偉大なる神ブラウン』や『特別な人』を扱った第一部では、「仮面」によって象徴される自己のなかの他者性、あるいは失われた自我同一性が扱われ、『皇帝ジョーンズ』を始めとして7つの戯曲を論じる第二部では、階級移動の意志と挫折、ジェンダーの揺らぎ、あるいは異性への思慕と恐怖、民族間の差異とせめぎあいが論じられる。『楡の木陰の欲望』や『夜への長い旅路』といったオニールの代表作を扱う第三部では、「家」への帰郷願望とその喪失感について、そして最初期の作品『地平の彼方』や晩年の『氷人来たる』を含む第四部では、マゾヒズムあるいは「死」の本能について、と個々の作品の具体的な場面に即してフロイトの抽象概念が裏打ちされてゆく。

例えば、『ラザルスが笑った』では、キリストに代わる神的存在として創造されたラザルスは、しかし虚しく敗退した。オニールは、古い神と袂を分かち、科学の進歩には疑惑の目を向けつつ、新たに自分の運命と信頼を託すことのできる存在を模索したが、オニール劇の主人公たちも、厳しい現実と自己の非力のために、最後に残された幻想すらも守ることができなくなる。最高傑作の一つとされる晩年の『氷人来たる』には、敗残の人生を送る無神論者のなれの果ての姿が辛辣に、そして同情をもって描かれている。アルコールと麻薬によってかろうじて生をつなぐ男たちは、自己の状況を客観視できないまま、辛うじてその日その日の生をつなぐのみである。

著者は、こういった状況の背後に本質的には、神に対するオニール自身の信仰と不信とのアンビヴァレンスが存在すると主張する。神を失って確固たる自己を見出せない近代人の苦悩を抱えたオニール劇の主人公たちが崇めるのは、人間の精神を酩酊させてこの世の苦悩を忘れさせる破滅の神であり、反キリストを志向する異教の神である。そこには、厳格なカトリックの教育を受け、信仰を捨てきれないまま、にもかかわらず無神論へと傾倒せざるを得なかった作者の複雑な内面の葛藤が投影されていると著者は論ずる。

神による救済の可能性を断たれたオニール劇の登場人物たちは、保障のない無限の自由と避けがたい死の脅威といった両極間の狭間でおののき、空威張りを繰り返し、神を否定しながら神の懐に抱かれる日々を秘かに夢見るという二律背反に引き裂かれる。人間の理想と希望であったキリスト教への信仰を無の暗闇へと呑み込もうとする無神論の時代にあっては、人生の目的と計画を自分の判断と責任において請け負うことが人間の宿命であった。

このような劇的展開を前にした観客は、何が正しく何か間違っているのか戸惑い、深い不安に襲われ、舞台上に現前する「不気味なもの」を目の当たりにすることになる。

かくも暗い人間の内奥を描くオニールの戯曲だが、しかしそこには観客の心を捉える大きな魅力がある、とする著者は、敗残者への辛辣なブラック・ユーモアとともに、作品が人間に対する深い愛情に支えられているからだと述べる。神を呪う人物をオニールが創造し得たのは、神に対する不信ゆえであっても、その人物の苦しみを温かく見つめるオニールの愛があったからだと著者は結ぶ。

審 査 の 結 果 の 要 旨

清水純子氏の学位請求論文『ユージン・オニール研究　視線をとらえる「不気味なもの」』は、フロイトが使用した「不気味なもの」という概念を整理し、オニールのほぼ全作品を対象に、そこでの主題形成のプロセスそのものが際立ってフロイト的であることを立証しようとしたものである。この作業を通じて著者は、オニールの生きた19世紀後半から20世紀前半が無神論の洗礼を受けた神なき時代であったと強調して、オニール戯曲群を生んだ時代性を浮かび上がらせようとも試みている。

「アメリカ演劇の父」として戦後の演劇文学を開花させたオニールだが、近年その研究は手薄になっており、

膨大な数の戯曲を総合的に論じた研究は意外にも少ない。著者の功績は、何より、長期にわたってこの作家と取り組み、全作品を読み解き、日記･インタビューなどの関連記録を余すところなく渉猟したことにある。

本論文の主題は「不気味なもの」という概念を巡るものだが、その概念が指示し得る作品内の諸現象は広範かつ多岐にわたる。もとよりフロイトのこの概念は曖昧で、明確には捉えにくいものだが、著者はいわばそれに丹念に「客観的相関物」を与えようとしたと言ってよいだろう。本論文の興味深さは､「不気味なもの」という通常はネガティヴに受容される概念が、同時にオニール劇の深い魅力ともなり得ている点を前面に出して論じているところにある｡オニールの主要な作品のほとんどを取り込んだ著者の情熱もさることながら、関連する多彩な問題のそれぞれに果敢に挑戦した点は高く評価してよく、それは一作家の作品論を超えたアメリカ文化論ともなっている。なかでもクラス・ジェンダー・エスニシティーを対象にした第二部の「領域侵犯」が提起した問題は極めて現代的で、今後の研究に実り多い成果を予感させる。また、個別の作品の個別の場面解釈からは、従来見過ごされていた斬新な読みも提示されている。

しかしながら、オニール研究の新境地を切り開こうとする本論文にも欠点がないわけではない。論旨の一貫性を重んじようとするあまり、作品の解釈が恣意的になる傾向が散見される。またフロイトの「不気味なもの」が、本論を通じてより堅固に豊かに概念化し得たかどうかも疑問が残る。オニールの精神性にとって重要としながらも、宗教的側面の精緻な議論－「無神論」について、オニール家におけるアイリッシュ・カトリシズムについて－が不十分であることも指摘しなければならない。

こういった点にまだ改善の余地はあるが、本論文の総体としての価値はいささかも揺らぐものではなく、著者がオニール研究にとって貴重な一歩を進めたことは間違いない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。